



卓越した若手研究者の育成を目指して

埼玉大学

テニュアトラック普及・定着事業

埼玉大学研究機構テニュアトラック第一回シンポジウム

民族の罨

—ユダヤ人とパレスチナ人の場合—

日時/ 2014年8月2日(土) 14:00~17:30

場所/ 埼玉大学 理工学研究科棟 7階 国際セミナー室

プログラム

総合司会/ 山崎敬一 (埼玉大学教養学部、社会学・エスノメソドロジー)

14:00~14:05 挨拶 桐谷正信 (研究機構副機構長、教育学部)

14:05~14:15 「民族の罨」序説 鶴見太郎

14:15~14:45 「ロシア・ユダヤ人」と「ユダヤ人」のあいだ

鶴見太郎 (埼玉大学研究機構・教養学部、テニュアトラック教員)

14:45~15:15 <ベドウィン>と<パレスチナ人>のあいだ—先住民概念をめぐって

田浪亜央江 (成蹊大学アジア太平洋研究センター)

15:15~15:45 承認と否定のはざま—和平交渉と「パレスチナ人」(仮)

鈴木啓之 (東京大学大学院総合文化研究科)

休憩

16:00~17:30 討論

澤田和彦 (埼玉大学教養学部、ロシア文学・日露関係史)

宮田伊知郎 (埼玉大学教養学部、アメリカ都市史・南部史)

問い合わせ先 : テニュアトラック推進オフィス 048-858-9158

ホームページ : <http://www.saitama-u.ac.jp/iron/tt/>

「民族の罨」概要

ーユダヤ人とパレスチナ人の場合ー

過去1世紀にわたって繰り広げられてきたいわゆるパレスチナ問題は、パレスチナの地をめぐるユダヤ人とパレスチナ人の間で繰り広げられてきた紛争として理解されている。しかしより本質的には、それは「民族」という概念にまつわる闘争である。この概念は、ある範囲の人々が、幾世代にもわたって、社会的・経済的・法的・文化的に他の人々から区別される存在であることを意味する。それゆえ、近代社会において民族は、政治的にきわめて重要な存在であるとみなされる。

ユダヤ人が「普通の民族」になることを目指して始まったシオニズム運動、そしてイスラエル国家建設は、パレスチナの地で、「パレスチナ人」というもう一つの民族と対峙することになった。だが1世紀前、それぞれの前身とされる人々は必ずしも「民族」という概念を自らに当てはめようとしていたわけではなかった。例えばユダヤ人は、ユダヤ人であるのと同時にロシア人やポーランド人でもあった。パレスチナ人は、イスラームを介してネットワークが広がるアラブ世界の混淆性に深く根ざしていた。なぜ彼らの一部は、自らをあえて民族として喧伝していくことになったのか。パレスチナをめぐるユダヤ人とパレスチナ人とのあいだにはいかなる相互作用があったのか。そしてこうした過程のなかで、彼らは何を失ったのか。

本シンポジウムでは、ユダヤ人やイスラエル、パレスチナ人にまつわる歴史と現状に即して、民族概念が近現代史において持ってきた魔力と陥穽について幅広く議論していきたい。